

今できることを精一杯に



若林里衣

九州大学大学院工学研究院応用化学部門
[819-0395] 福岡市西区元岡744番地
助教, 博士(工学).
専門は超分子化学.
wakabayashi.rie.122@m.kyushu-u.ac.jp
<http://www.bioeng.cstm.kyushu-u.ac.jp/index.htm>

私は四人姉妹の次女である。幼い頃は若草物語、中・高時代はポッキー四姉妹ともてはやされたものだ。世間の人が四人姉妹という言葉の響きから想像する美しい(?)イメージとはかけ離れ、家の中は生存競争であった。その中で比較的控えめだった私に、父は「あなたは企業での競争に向かないから、大学に残りなさい」と言った。昭和を生きた父は、今のアカデミアがいかに競争社会なのか理解できないらしい。そんな父の言葉を真に受けるほどおっとりしていない私であるが、研究者になるというほんやりとした希望は研究室に入り「研究」に触れることで明確なものとなり、幸運にも今こうしてここにいる。

工学部の女性教員になってから、ダイバーシティに関するさまざまな講演の機会に恵まれた。声を掛けていただく以上、喜んで講演に臨むのだが、いつも少し悩んでいた。あるとき主催の先生が高校の先輩だったので、思い切って疑問をぶつけてみた。「私は結婚も出産もしていないし、親の介護をしている訳でもない。生物学的に女性であるだけで、ほかの男性と何ら変わりはない。演者として不適ではないか」と。先輩先生は「女性だって色んな人がいていい。それこそがダイバーシティ。そのことを知ってもらうのも大事」と言ってくれた。その言葉に、自分がいかに性別による役割分担という固定観念に囚われていたかに気づかされた。男性研究者もいろいろいるのだから、女性研究者もいろいろ。そりゃそうか、同じ家庭に育った四姉妹もそれぞれ違った道を歩いている。それ以来、変にプレッシャーを感じずに依頼を受けることができるようになり、先輩には感謝している。ただ、大学教員、とくに工学部はほとんどが男性で占められた男性社会であり、家庭との両立だけでなく、生きづらさを感じている女性研究者が少なからずいることは申し添えておきたい(私自身は鈍感なのか、あまり感じないのだが)。

さて、そんな私も縁あって親となった。時を同じくしてコロナ禍に突入。コロナ禍はさまざまな負の面をもたらしたが、オンラインツールの普及や柔軟な働き方の受容等、これからの社会にとってプラスになる面もあったように思う。とくに育児中の研究者として、

オンライン化により学会参加を諦めずに済んだし、家からミーティングに参加することもできた。最近再開された対面学会で生の討論を目の当たりにするとその良さは実感するが、宿泊をとまなう出張では子の対応に頭を悩ませる。夫と週末婚の私の場合、週末以外では子の帯同が第一選択となる。託児所の有無を調べ、ない場合は託児場所・シッター手配を行う。最近はさまざまな支援が充実し、所属大学でも3年前に出張先でのシッター費を研究費で支出できるようになった。しかし、いざ申請すると「工学部で初のケース」と言う。これだけ沢山の若手を含む教員が所属しているのに、と思う気持ちはある。しかし、これからは女性だけでなく、共働きの配偶者をもつ男性研究者にとっても必要になるはずで、その若い方々のために開拓するのも自分の役割と思い、改善が必要な点は提案するよう心がけている。その中で感じるのは、学内外の方々の温かく強力なサポートである。相談をすると、さまざまな情報を集め提案してくださる。ただでさえ忙しい中、ここまでやってくれるのかと驚きと感謝の気持ちでいっぱいになるとともに、自分も繋いでいきたいと思う。入念な準備をしたつもりでも上手くいかないこともある。先日の講演会では子がシッターさんに馴れず、結果、子を抱いた状態で講演することになった。時節「ママ、なにしてるの?」という合いの手が入りながら。終了後、すみませんと謝る私に主催の先生が「お子さん抱きながらも冷静で良かったです!」という温かい言葉をくださった。もちろん子どもを理由に迷惑をかけて良いという意味ではないが、完璧でなくとも今の状況でできることを精一杯やれば受け入れてもらえると感じるし、励みになる。ダイバーシティにはインクルージョン。互いの事情を理解し柔軟に支え合う姿勢、状況に合わせ今できることをするというマインドは、多様性の時代に必要だろう。

こんな私が前向きに研究を続けていられるのは、間違いなく日々温かくサポートくださる研究室の先生方、スタッフ・学生の皆さんのおかげで、感謝してもしきれない。明日からは初めての子連れ海外出張。緊張を抑えながら筆を置き、新たな戦いに備えることにする。